



斜めに走る「くも綱」とおっかなびっくり渡る人々

Enjoying the thrill "Kazura Vine Bridge in Iya"

# スリルを楽しむ「祖谷のかずら橋」

## 徳島県・三好市

Special Features / Civil Engineering Heritage XI



国際航業株式会社/東日本事業本部/事業推進部  
惣慶裕幸(会誌編集専門委員)  
SOKEI Hiroyuki

特集  
土木遺産 XI  
家族で楽しむ土木遺産

### 適度なスリルを味わえる橋

徳島県の西部、北は香川県、西は愛媛県、南は高知県と接する三好市。その南部、山深い西祖谷山村善徳に「祖谷のかずら橋」がある。所在地から「善徳のかずら橋」とも呼ばれる。吉野川の支流祖谷川にかかる長さ約45m、水面からの高さ約14mのシラクチカズラ(サルナシ)を使った吊橋である。山口県の錦帯橋、山梨県の猿橋と並び「日本三大奇橋」といわれ、多くの人が訪れる観光名所になっている。稀に怖くて渡ることを断念する人がいるくらいの「適度なスリルが味わえる橋」である。

橋の幅約2mは意外に広く、手すりの役割をする綱「うわてどり」を両手でつかむことができない。必然的にどちらかの端に寄り「うわてどり」をつかんで進むことになる。ほとんどの人が恐る恐る慎重に足を進めて渡っていく。橋の上は涼しい渓流の風が吹き抜けていくが、涼しさは風のせいだけではないだろう。

怖さの要因は3つある。1つ目は川からの高さで、高すぎると実感が湧かないものだが、14mは実感できる。2

つ目は床が板ではなく、直径10cmほどの木材「さな木」を20cmほどの間隔に並べた「水平に置いたはしご」のような構造で、足の置場を確かめないと踏み外しそうであり、大人なら隙間から落ちないとわかっていても、谷底に見える清流の流れによって恐怖感が増す。3つ目は橋の揺れである。古い民謡「祖谷の粉挽き歌」に「風も吹かんのにゆらゆらと」と唄われているように揺れる橋である。しかし後述する橋の特徴と、橋を揺らすような速度で渡れないために揺れはさほど大きくない。

この橋は、一度は針金の吊橋に取って代わられたが、1928(昭和3)年の再建以降はシラクチカズラでの架け替えを繰り返して維持されている。なぜ、かずら橋が再建されることになったのだろうか。

### かずら橋の特徴

橋の構造は吊橋といえるが、現代の吊橋とは異なっている。

一般的な吊橋は両岸に垂直に立てた塔に渡した綱か



写真1 「さな木」の隙間から見える谷底



写真2 2本の柱が「とり木」、水平方向が「かさ木」、路面下にある「よこ木」



写真3 両岸から伸ばした「ぶち木」

ら通行路を吊る。かずら橋は両岸の高い樹木を塔代わりとし、この樹木から片岸4本合計8本の「くも綱」を斜めに張って通行路の中央部を吊っている。中央で斜めに交差する「くも綱」の描く曲線が美しい。両岸近くは中央部と異なり、岸から伸ばした2本の「ぶち木」で吊る。ぶちとは腕を意味する。垂直の塔と斜めの腕で支える構造が外観上の大きな特徴である。

通行路は、両岸の「よこ木」の間に渡した「しき綱」5本で支えており、これは吊り床版橋の特徴である。「しき綱」の中央部が下がりU字型になれば通行路もU字型になり通行しづらい。通行路を水平近くに保つため、両岸近くをぶち木で、中央付近を「くも綱」で吊る工夫がなされている。

吊橋を渡る際に、踏み出すリズムによって揺れが増幅し怖い思いをした方も多いただろう。一般的な吊橋が2本の綱で通行路を吊る構造と異なり、複数の「くも綱」「ぶち木」で吊る構造が大きな揺れを防ぐ効果を生んでいる。

橋の手すり・壁を構成する「うわてどり」「なかくてどり」は両岸に立てた「とり木」に結ばれ「かべ」を介して通行路を吊り、これは現代の吊橋と同じ構造である。

### 山深い祖谷

橋がかかる祖谷川は、霊峰剣山を源とし西へ流れ、かずら橋の先で北へ向きを変えて吉野川に合流する。吉野川への合流点まで50kmの流域と、支流の松尾川の流域を合わせた範囲が祖谷地方である。

祖谷地方は周囲を急峻な山地に囲まれている。祖谷川・松尾川は深い渓谷を刻み、対岸との往來を遮断してきた。多くの地域で川沿いに交通路が開けるものだが、断崖絶壁が続く区間は人馬の移動を阻んできた。必然的に他の地方との往來は峠越えになった。物資の運搬

には牛馬も用いられたが、急な山道では人力に頼るしかなかった。

祖谷地方は、ほとんどが山岳地であり段々畑で主に畑作を営んできた。水田はわずかで、米が配給制になる以前は米の入手が困難で、麦・稗・粟・きび等の雑穀やいも類を主食としていた。橋近くの斜面には棚田の跡が見られる。平地での水田耕作以前の山での暮らしが色濃く残り、周囲との交流が少なく独自の伝統がこの地には残されてきた。平家の落人が移り住んだという伝説が残されるなど、秘境のイメージにふさわしい地域である。

### かずら橋の成立

現在は上流にできたダムのため祖谷川の出水も少なくなり、谷を歩いて渡れるほどだが、以前は水量が豊富で対岸との往來には橋が不可欠だった。かずら橋のほか「柴橋」「浮橋」が架橋地点の状況に応じて架けられ、時代とともに架橋地点や橋の大きさが変化していった。

柴橋は両岸からつきだした岩に周囲50cm弱の丸太3本を並べて架け渡し、その上に雑木や柴を藤づるで編みつけた橋である。岩場にかけるために固定できず流されやすいが、架けやすいためよく使われた。かずら橋の下流で市役所の支所がある一字地区の柴橋は、ある年には7度も架け直されており、水位が下がってきたので架け直したところ、大雨でその日にまた流されてしまったこともあったと伝えられる。

浮橋は両岸に渡した綱に筏をくくりつけた橋である。大水の際には、綱の片方を切って大水をやり過ごした。筏が流されることも多く、次第に材料を近くから確保できなくなったことから、その運搬労力が多大になった。そこで両岸に渡した綱で空中を渡す「かずら橋」が生み出されたと考えられている。



図1 版画に描かれたかずら橋

柴橋やかずら橋では牛馬が渡れないが、「川を渡れること」が重要で生活の橋としては十分な構造だった。かずら橋の架橋位置は、その構造から兩岸が接近しスギやカシ等の大木が生育している場所に限られるものの、増水しても渡れる橋は地域の人々に貴重な存在となった。

最初は入手しやすいフジヤツタが用いられたが、重い荷物を背負っての通行に耐えられず、すぐ傷み腐りやすかった。やがて、近くの高地に自生するシラクチカズラの強靱で腐りにくく、加熱すると曲げやすくなる特徴が知られるようになり、それが使われるようになったと考えられている。この地域に古くから住んでいたという、木材加工を生業とした「杣」と呼ばれる人たちの知恵が生かされたかもしれない。

かずら橋についての最古の記録は、江戸時代の1646(正保3)年の『阿波国図』で、祖谷地方の7カ所が記されている。1793(寛政5)年の文書には「善徳の橋を第一とし」と記され、かずら橋の中でも大きく立派な橋だったようだ。1811(文化8)年の版画には、善徳のかずら橋が描かれ、くも綱とぶち木で支える構造は現在と同じである。

1911(明治44)年の調査では東・西祖谷山村に8つのかずら橋があった。なかでも変わった橋としては旧東祖谷

山村柄の瀬のかずら橋で、右岸にはくも綱とぶち木があったが、左岸は巨岩にシラクチカズラを縛りつけている構造だった。しかも右岸が左岸より高くなっていたため、右岸から左岸へは下ることになり、歩行が難しく危険を感じたと伝えられている。

### 交通の変化と橋の消失・復活

1902(明治35)年から日露戦争による一時中断を経て、1920(大正9)年に三村組合道路(現在の県道32号線)が完成した。これにより旧池田町から祖谷川沿いに旧東祖谷山村まで車両の通行が可能になった。物資の運搬の需要が高まるにつれ、荷車や牛馬車が通行できない柴橋やかずら橋は針金の吊橋に架け替えられていった。大正年間に入り旧西祖谷山村に3つ残っていたかずら橋は、1921(大正10)年には善徳1つになった。

村の中心は数百年の間、善徳の対岸の重末集落だったが、交通の大動脈となった三村組合道路から祖谷川を渡り斜面を登る必要があり、村役場・駐在所・郵便局を利便性のよい場所に移転させたいという要望が高まってきた。1914(大正3)年に郵便局が三村組合道路沿いの一字に移り、村の中心が移転し始めた。郵便局と役場を結ぶ一字の柴橋が増水で使えない時は、善徳のかずら橋まで迂回を余儀なくされた。その後、重末小学校の廃校に伴い小学生が祖谷川を渡り善徳小学校へ通うことになり、通学の安全に配慮して1923(大正12)年3月に板敷きの針金の吊橋に架け替えられたことで、かずら橋は消失することになった。

しかし町の発展上から、かずら橋を復活させるべきと考えていた当時の池田町長の田原作太郎は、祖谷溪保勝会を組織して1927(昭和2年)11月から橋の復活に着手した。そして善徳の青年団長片山頼政を通じて青年団等の協力を得て、翌年3月に針金の吊橋の川下にかずら橋を新設した。この時に「しき綱」「うわてどり」には鋼線を入れて、観光客の安全を確保することにした。こうして、生活の橋が観光の橋として復活したのである。

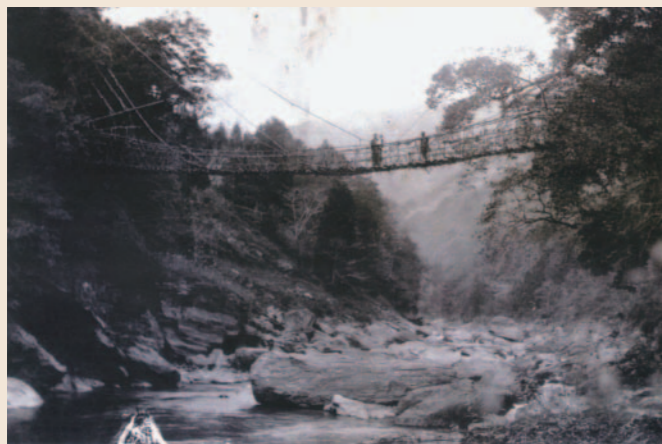


写真4 かつてのかずら橋



写真5 谷間にかかる橋

1928年に復活した橋は、現在の橋に比べて中央部が低く、各部材も細く華奢なつくりに見える。集落間の行き来ができればよかった頃と異なり、現在の橋は観光客の事故を防ぐため、くも綱ほか主要な部分に鋼線を入れている。昔は枝の上面を削って平らにしていた「さな木」も、現在は角材になっている。観光のシンボルとしての見栄えにも配慮し「とり木」等にも太い木材を用いている。

### 3年に一度の架け替え

橋の部分的な補修は適宜行われているが、材料のかずらが傷むため、定期的に架け替えが必要である。かつて毎年の架け替えの際に両端で同時にくも綱を切って橋を谷底に落とすさまは見ものだったという。1948(昭和23)年以降は3年に一度架け替え、最近では2010(平成22)年に23回目を行った。この時、やはり復元された奥祖谷の二重かずら橋と架け替えが重なり、近辺で材料のシラクチカズラを確保できずに高知に材料を求めた。

架け替えは農閑期で落葉樹が葉を落とし、かずらを採取しやすい秋以降に行く。かずらの生育地の調査から始め、10月中旬に約7tのつるを集めてくも綱などを作っておき、1月から1カ月程度で架け替える。架け替えはかつて利用する集落の共同作業だったが、現在はかずら橋保勝会が材料の確保を含めて行い、伝統の技術を継承している。

### 祖谷のシンボル

道路が整備された現在では、国道から県道42号線で国見山をトンネルでくぐり、県道32号線を使って難なくかずら橋を訪れることができる。吉野川の小歩危・大歩危の峡谷をさかのぼり、山を越えて祖谷に入り、急峻な山の中腹に散らばる家々を見ると、山深いところに来たと感じる。市はそんな秘境のイメージを売りにして観光に力



写真6 斜面に広がる善徳の集落

を入れている。集落をつなぐ生活の橋は、日本中から人をひきつける祖谷のシンボルになり、1988(昭和63)年からは毎年25万人以上、2002(平成14)年以降は30万人以上が橋を訪れている。この地域に暮らす人々の経験から生まれた橋を、これからも伝えていってほしい。

#### <参考資料>

- 1) 『西祖谷山村史』西祖谷山村役場 1985年 徳島県三好郡西祖谷山村
- 2) 『壺橋の製作工程』徳島県教育委員会 1962年 文化財保護委員会
- 3) 『かずら橋』西祖谷山村 1992年
- 4) 『徳島の文化財』徳島県教育委員会・徳島新聞社編 2007年 徳島県教育委員会・徳島新聞社
- 5) 『祖谷のかずら橋』四国大学附属図書館蔵
- 6) 『阿波国祖谷山かずら橋実景』1928年 原田商店
- 7) 『人は何を築いてきたか 日本土木史探訪』土木学会 1995年 山海堂
- 8) 『市報みよし7月号 No.17』三好市役所総務課 2007年
- 9) 『四国・徳島 祖谷』パンフレット 三好市観光案内所・三好市役所観光課

#### <取材協力>

- 1) 徳島県三好市教育委員会文化財課

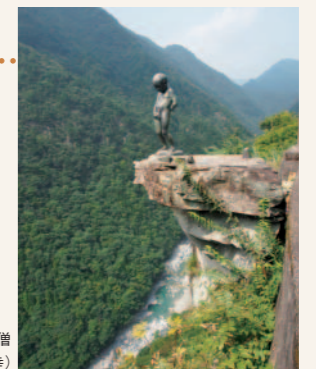
#### <図・写真提供>

- 図1 文献5)  
P24上、写真2、5、6 惣慶裕幸  
写真1 遠藤徹也  
写真3 塚本敏行  
写真4 文献6)

## COLUMN

### V字谷の続く祖谷溪

祖谷溪は、吉野川の支流祖谷川が四国山地を刻んだ渓谷です。季節の移り変わりと共に色を変える谷は、景勝地として知られています。この急峻で深い谷は断崖絶壁の連続で、長い間人馬の往来を阻んできました。しかし1902(明治35)年から1920(大正9)年にかけて、日露戦争の中断をはさんで祖谷街道(現在の県道32号線)が建設されると、車の往来が可能になり、祖谷地方の大動脈となりました。その祖谷街道の一番の難所といわれた高さ200m近い絶壁の上に、この工事の爆破作業でも残った岩があります。その昔、旅人や地元の子供たちが度胸試しをしたという話にちなみ、高さ1mのブロンズ製の



渓谷を見下ろす小便小僧  
(写真:惣慶裕幸)

小便小僧が置かれています。多くの観光客が訪れ絶景を楽しむ人気スポットになっています。谷をのぞき込めば、斜面の緑、崖の白さ、谷底を流れる水の青さが鮮やかですばらしい風景を楽しめます。